

## P01

### ネパール歯科医療協力会の活動

～ネパール山岳地域ナウリコット村住民の  
歯科疾患状況～

○麻生弘、大野秀夫、志賀和子、岡井有子、  
駒井伸也、白田千代子、深井穂博  
(ネパール歯科医療協力会)

#### 【はじめに】

ネパール歯科医療協力会は、1989年からネパールにおいて歯科保健を中心とした国際医療協力を行っている。1994年からは、都市化の影響を強く受けつつあるネパールの首都カトマンズ近郊ラトリプール郡の村において学校歯科保健を主体に自立型地域保健開発を行ってきた。

今後、ネパール人主体の地域歯科保健活動を他の地域へ拡げていく上で、他の地域の口腔保健環境を知ることは重要である。

今回、都市化の影響を比較的受けていないと思われるネパール中西部のヒマラヤ山中の村で、口腔検診と保健行動調査を行ったので報告する。

#### 【対象地域】

ネパール中西部都市ポカラから北に位置するヒマラヤ山中カリガンダキ渓谷沿いのナウリコット村  
標高: 約 2700 m、人口: 約 100 名  
主要産業: 農業と牧畜、小学校: 分校1校  
生活: ほぼ自給自足の生活  
電気: 各家庭には電気の供給有り

#### 【調査方法】

村の家庭を巡回訪問し、歯科検診とインタビューによる口腔保健行動調査を行った。

#### 【対象者数】

9歳以下が11名、10～19歳が11名、  
20～59歳が21名、60歳以上が18名の  
計61名であった。

#### 【結果およびまとめ】

1. 都市化の影響を受けていないと思われたヒマラヤ山中の小村において、ラジオ、テレビによる情報や道路交通の整備に伴う物資の搬入により、これまでの自給自足の生活に変化がみられた。

2. 口腔内の状況から歯科医療の必要が認められた。しかし近年ネパールでは歯科医師の養成が始まったばかりで、ネパール中西部のヒマラヤ山中の村では歯科医療提供体制は遅れており特に山岳高地においては皆無であった。

3. 小児および学童期に対する予防と教育を中心とした地域歯科保健対策が必要と考えられた。

## P02

フィンランドと日本における歯科事情の違い

○齋藤 幹、佐藤恭子、西俣はるか、藤原 卓  
長大院・医歯薬・小児歯

#### 【目的】

フィンランドは1972年の公衆衛生政令(Public Health Act)により歯科予防に力をいれ、1995年には12歳児のDMFTが1.2に減少した。しかし近年では日本と同様に国の医療費負担が増加し、歯科の予防や公衆衛生に対する医療費が十分でないのが現状である。その反面、DMFTは2010年までほとんど変化が見られず、日本よりも低い値を示している。そこで、フィンランドと日本の歯科事情の違いについて比較検討を行った。

#### 【方法】

ヘルシンキ大学小児歯科での診療と、その他にフィンランドと日本の公衆衛生のデータや文献を元に検証した。

#### 【結果と考察】

歯科医師一人あたりの患者数はフィンランドと日本ではほぼ同数であったが、フィンランドでは歯科医師不足と言われている。このことは、フィンランドの未成年の定期診査受診率が77%、成年のそれは50%であるのに対し、日本は未成年、成年ともにフィンランドより低いことが一要因と考えられる。

12歳で齲蝕を持たない人は年々増加しており、フィンランドが42%程度であるのに対し、日本では30%程度であった。

フィンランドのように国家レベルで齲蝕予防に取り組み、小児のDMFTを下げるのが重要で、それにより子どもが成人になったときに親から子へ定期健診やブラッシングの重要性が受け継がれると考えられた。

#### 【謝辞】

今回の発表に御協力頂いたヘルシンキ大学小児歯科 Prof. Satu Alaluusua に御礼申し上げます。